



第 6 回

富嶽三十六景 神奈川沖浪裏

葛飾北斎

錦絵（多色摺木版） 24×35.6cm 1830年頃
東京国立博物館蔵

Image:TNM Image Archives

絵画史上、最も動的な作品

北斎に興味をもったのは、もともと私がフェルメールの大ファンだったからである。フェルメールと北斎には百年以上の隔たりがあり画風も全然違う。どこにつながりがあるというのか。

それは「動き」ということである。私たちの生命と世界は動的だ。一瞬たりともとどまらず絶えず流転している。一方、絵はとまっている。画家たちは絵という本来的に静的な方法を使って、いかにして動的な世界をそこに表現するかを追求してきた。それが芸術の最大の目標であるといってもいいくらいだ。

フェルメールは、振り向き様の女性、ふと楽器の手をとめて窓の外を眺めみた瞬間、あるいはミルクを注ぐ姿の中に、そこにいたる時間とそこから始まる時間を封じこめることに成功した。それがフェルメールをフェルメールにした。

北斎もそのことに極めて自覚的だった。「神奈川沖浪裏」を見てみよう。北斎が描いた波はまるで生きているように見える。

北斎は生きていること＝生命の本質に気がついていた。生命は絶えず揺らぎつつ、変化と変奏を含んだ動的な平衡としてそこにある。生命は流れであり、エネルギーのうねりだ。

「神奈川沖浪裏」は、旋回するエネルギーが、その勢いを失うことなく、大きな波となってその極点に達した

まさにその瞬間、一瞬の静止の後、砕け散って次のうねりに手渡される様子を描ききった傑作である。それは、まさに生命のありようそのものである。

北斎は、生命の色である青を使って、生命の存在を描いてみせたのである。

フェルメールと北斎を結ぶ細い糸のもうひとつが青という色だ。フェルメールは鮮やかな青を表現するため稀少で高価な鉱物ラピスラズリを使った。

北斎はフェルメールの死後、登場した新しい青、「ペロ藍」にいち早く着目した。このきめの細かい顔料は水で溶くと薄くのぼしたり、滲ませることができた。これを使って北斎は、絵の中で青を動かすことに成功した。「神奈川沖浪裏」には、遠ざかる青、近づく青、連続する青、旋回する青が躍動している。

そこには、生命がもつ創造力、破壊力、あるいは歎びや怒り、あらゆるエネルギーのうねりがこめられて、宇宙にまで届いている。青を動かすこと。生命の色を動的なものとして描くこと。フェルメールですらできなかったことを、北斎は成し得たといえる。あざやかな青を用いて、森羅万象の生命の輝きを描き続けた北斎は、絵師であり、哲学者であり、そして同時に科学者でもあったと思えるのだ。

福岡伸一
ふくおか・しんいち

生物学者、青山学院大学教授。
1959年東京都生まれ。京都大学卒業。
ベストセラー『生物と無生物のあいだ』（講談社現代新書）、
『動的平衡』（木楽舎）など、著書多数。
フェルメールに魅せられ、2011年に
『フェルメール 光の王国』（木楽舎）を上梓。
12年に美術館「フェルメール・センター銀座」をオープン、
館長を務める。13年には同館で
展覧会「あっぱれ北斎！ 光の王国展」を開催した。